

歴史から文学へ

——漂流物語の変質

春名 徹

問題の所在

本稿の筆者は年来、歴史研究者の立場から近世の漂流を対象として来た。この過程で本来の「漂流記」——つまり漂流の経験を当事者が語った史料——に第三者の手による潤色が試みられ、記述を語り直すこと、すなわち広義の文学化が行われる記述に注目するようになった。そこで歴史的事実に加工が施され、いわば想像力による飛躍が試みられたこの種の事例を対象として初歩的な考察を試みることにした。

かつて「炉辺談話型漂流記の形成^(注)」において、私は石巻の廻船若宮丸のロシア漂流にかんする新史料『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亞漂流之事』の成立事情を奥書によって解明した。この記録は私の提唱による類型にしたがえば「炉辺談話型漂流記」の範疇に入る性格のものである。ところが関連史料を渉獵するうち、古賀洞庵が筆写したロシア関係記録の集成『俄羅斯紀聞』に収める「魯西亞漂流記」が同一事件を再話したものであることに気づいた。この物語の氏名不詳の筆者は、おそらくは漂流者とは直接に関与することなく、既存の聞書である『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亞漂流之事』を下敷きにして文飾をほどこしたものと思われる。

そこで私はこれまで提唱して来た漂流記録の三類型の他に「娯楽用に変形した事例」にかんする第四の類型をたてる

必要があるのではないのだろうかという予感を述べたのであった。これを契機として、いささか考察を進めた結果が以下の小論である。

□歴史から文学へ

考えてみれば、漂流にかんする物語を、歴史史料として読もうとするのは、現代の歴史研究者が対象にたいして選り取ったひとつのスタンスにすぎない。同時代人の立場に身を置いてみるなら、他者の珍しい体験は、まず事実性それ自体のにたいする関心にもとづいて記録され伝承されたであろうが、同時にそれが娯楽の対象となる読み物として語りなおされる可能性はつねに存在していた筈である。

とりわけ近世の日本社会は大衆的な文化が発展し、寺子屋教育の普及と相まって識字率が向上し、大衆的な娯楽の環境として消費されることを目的とする物語が生産されるようになった時代である。漂流という事件を契機に物語が生産される基盤は充分に存在していたのである。そして歴史記述イストワールと物語イストワールとは、本来、相互に無縁な存在ではない。

歴史的事実を土台にして物語が発生し、物語自体の内在的な契機にしたがって発展して行く過程は、一時代の想像力のあり様それ自体にかかわるものである。近世の日本社会における漂流記の位置は、写本によって普及し、転写の過程でさまざまな異本を生じたいわゆる実録物の読本などとも近い関係にある。その総体を扱うことは筆者の任に耐えるところではない。ここでは漂流という一事象を対象とする記述と、その変メタモルフォーゼ貌にかんする歴史研究者の立場からの考察ということに範囲を限定しておきたいと思う。

これまで漂流にかんする記録の中軸となす「漂流記」を、私は漂流という経験をした主体（基本的には水主すなわち廻船の乗組員＝漂流者）とそれを筆記した記録者（奉行所関係者、学者などの識字者）との関係において①口書（口述書）②編纂物漂流記③炉辺談話型漂流記の三類型に分類して来た。

漂流という歴史的な事件にかんしては、このように記録がもっぱら第三者によって行われることが大きな特徴である。就中その後の記述に大きな枠組を与えるのは、漂流民を受け入れる窓口となる長崎奉行所の官吏が作成する口述書

(口書)である。この第一類型では、対外関係を国家が厳しく統制した近世の制度的な背景のもとでは、まず「出入国管理上の関心」として位置づけ得る関心が事情聴取の中心をなす。すなわち原籍地を出航して以後の(海難に遭遇した時点ではない)航海の記録、海難と漂流、救助と送還の全過程が詳細に記述される。それにもなつてカソリック教へ入信の事実がないこと、密貿易を行っていないことが確認される。付随的に外国の風俗や言語についての記事がともなう場合もあった。

第二のレベルとして学者、有識者による「編纂物漂流記」が編まれた。この場合の主な関心は漂民をつうじて異文化への接近を試みることである。その基礎には、近世日本社会の閉鎖性にともなう特質から生じた異文化にたいする高い関心があった。

第三類型の「炉辺談話型漂流記」は、帰郷後の漂流者の談話を識字能力のある者が記録に留めたものである。この場合、漂流者はすでに帰郷して原籍を回復しているので、異国での経験を卒直に語っても発言にたいする責任を問われる可能性はほとんどあり得なかった。漂流者の経験を聞く側も、学者の事情聴取とは異なつて、珍しい体験をした者への純粋な好奇心が興味の中心に据えられることとなる。ここだけで詳細に語られる異国の冠婚葬祭や遊廓、芸能の世界などの通俗的な好奇心の世界もあり得たのである。いうまでもなく、ここで私は学問的価値と通俗的な好奇心を等価なものとして扱っている。

□「寛永漂流記」と「朝鮮物語」

まず漂流記を下敷きにして、異文化——この場合、朝鮮への関心を語った物語二点を取り上げる。順序としてまず原典となった漂流について概観しておこう。

寛永二十一年(改元によって正保元年—一六四四年)越前国三国浦新保の住人竹内藤右衛門、その子藤蔵、国田兵右衛門の三人は、船三艘を仕立てて総勢五十八人で蝦夷地へ交易に赴いた。北上の途中、佐渡カ島から吹流され、対岸の大陸側の海岸の「韃靼国」に漂着した。韃靼は本来、モンゴル族の一部族を指す言葉だが、当時の日本では中国大陸東北部に

住む女真（女直）族を意味する。

三國浦の者たちが漂着したのは、その女真族の住む現在の沿海州ポシェット灣付近と推測されている。彼らは現地の住民をたばかって朝鮮人参を手に入れようとして、かえってその民に陥り、竹内父子を含む大多数の者は殺され、船は焼かれ積み荷は略奪され、わずかに国田兵右衛門以下十五人だけが命を救われた。現地で畑仕事など手伝ううちに中央から役人が来て、村役人ともども奉天（現・瀋陽）の役所に召喚され、調査の結果、日本人には非がないことが判明し、村役人は笞刑に処せられた。

ヌルハチの指導のもとに国家形成を行い「後金」を建てた女真族は、時あたかも内乱に乗じて明帝国を倒した直後で、始めて「大清」を称し、中華に君臨した当年にあたっていた。越前人たちが漂着した地方は、まだ中央の統制が不完全な「野人女直」と称する人々が居住しており、日本人からの略奪も世界的にあまねく存在していた漂着物占取の慣習に従ったものである。これに反し、新興国家の意気にもえる清朝の政府は、野人女直を統制下におくとともに、あわせて異国民を撫恤、送還することによって国家（皇帝）の権威を示そうとしたのであった。

ともあれ日本人たちは、続々と山海関を越えて北京に入る女真族とともに北京に入城するという歴史的な経験をした。正保二年（清の順治二年＝一六四五）の新春は北京で迎え、十一月によく朝鮮にむけて出発、翌正保三年（一六四六）の正月はソウルで迎え、間もなく釜山に送られた。倭館の対馬藩士に身柄を渡された国田兵衛門らは、対馬を経由して同藩の大坂藩邸に送られ、そこで越前藩に引渡される。明清の交代に注目していた幕府は、越前漂流たちの経験を重視し、中心人物である国田兵衛門と宇野与三郎を江戸に召還して事情聴取を行った。この記録が『韃靼漂流記』ないし『異国物語』の名で伝えられる漂流記である。^{（注2）}口書の体裁ではあるが、事情聴取にあたった要路の人物が韃靼国（つまり清）での見聞を重視したため、後の長崎奉行所における口書のような類型化を免れている。三國出航以来の経験を順を追って記述し、各種の見聞は別に一書として巻末に列挙してある。どこまで意識したかは判らないが、中国正史の外国伝の体裁と似ている。

この漂流記録は写本として伝わった。現存する写本の数から推して、相当広く流布したものと思われる。

この実話を下敷きにして生まれたのが『寛永漂流記』（ないしは『寛永漂流民記』）と木村理衛門の『朝鮮物語』である。ともに木刻で刊行された。まず順序として、より年代が古いと推定される『寛永漂流記』^{註3}についてみよう。刊記を欠くので著者も刊年も不詳であるが、稀書複製会による影印本の解説では、各巻首に古体の篆書で「大明之部」「朝鮮之部」「付録」と巻名を記した形式、挿絵の画風に初代鳥居清信、同清倍などの筆勢があること、その構図の古雅であることなどから「宝永正徳を下らざる頃の刊行」（つまり西暦一七〇四〜一五年）と推定している。

内容からみても、漂流者の中心人物であった国田兵衛門、宇野三次郎からの直話という体裁（それ自体が仮構だと思いが）がある程度の説得力をもつためにも、時代の下限は正徳ごろとなりはすまいか。とりあえず、稀書複製会叢書の解説の時代設定を妥当なものと認めて論をすすめたい。

さて『寛永漂流記』は四冊から成り、第一冊が「大明之部」、第二、三冊が「朝鮮之部」で、第四冊に「附録」として朝鮮の地図や朝鮮の行政区分や官職にかんする短い知識、韃靼、中国、朝鮮語を併記した単語集などを収めている。

一〜三冊は越前漂流民の経験を再話した形式であるが、明らかに朝鮮への関心に比重が移っている。前述のとおり話者は直接、漂流当事者から聞いた話だという体裁をとっている。冒頭部分をあげておく。

いとまある折ふし、我がおこたりを思ひ出し、とまとちなる方へ書信侍べりしに、越後よりの賓人と当あるじ引合せて知る人にそなりけらし。みづからふと心にかみけるハ此近き年、三國の人海にたゞよひ、異なる国へ吹つけられ、年を経て我が国に帰るとなん聞しかは、知りたる事もあらめと思ひ、其客二人にしかくといひて同じ国の事なれ、若聞玉ひてんやと余所ことの様に尋ねけれハ、我々こそ其船に乗たる者にて侍ふ也、慰の為ともならば其時の事共をあらく語りまいらせんとたやすくもいひぬれハ、それこそ何かあらめと其むしろより聞初て後には賤が家へも呼あたらひ語らせしが珍らしく面白ければ兼て友とちといひかわし帰りたる後にてか書とむる事になんなりぬ右三国の人ハ国田長右衛門、宇野与三次とぞ申せし」

〔振仮名は原文のまま〕

これは『韃靼漂流記』巻末に記す「右の趣者、韃靼国より帰朝仕候十五人の内に、国田兵衛門、宇野与三郎と申者、越前より江戸へ指越候時、数多委細に相尋申、口上の段々如件」とあるのをふまえている。『寛永漂流記』の筆者は、これを借りて物語の枠を作ったのである。

以下は一書で「一、比は寛永廿一〔此年改元有て正保元年と云〕申の年の事なりしに越前国三国浦新保村の者共よりあひ、毎年奥州の松前へ商の為に船かよひす、今年も時いたりぬとて船よそほひし……」と物語に入っていく。

本文は挿絵入り、ふり仮名つきで平易な一般むけの読み物の体裁をとっている。種本となった『韃靼漂流記』（異国物語）は口書（口述書）の形式をとどめ、一人称であるが、これに反して『寛永漂流記』では、口書をなぞってはいるものの、三人称をとっていることが決定的な相違点である。些細な工夫ではあるが、作者が認識していたか否かは別として、人稱を変換することによって『寛永物語』は漂流者の経験という枠組の限界を超えて、物語が自由に飛翔し得る可能性を獲得したのである。

第一冊の「大明之部」では、漂着から奉天を経て北京に至り、最後に行列を作って朝鮮へ送られるまでの次第を記す。対象を「大明」とするのは『韃靼漂流記』を踏襲したもので明清の交代を厳密には認識しきれなかった時代背景を反映している。

第二冊は、越前漂民たちが朝鮮に送られてからの京城（ソウル）での見聞を記す。ここでも物語は『韃靼漂流記』を踏まえて進行するが、「それ朝鮮国ハ大明より東へつゞきたる国にて東海の浜は即日本にちかし。北は女直兀良哈をかぎり、南ハ珍嶋、济州、巨済の三嶋をはてとし、西北ハ山につゞき、川をへだち、東南に海をうけたり。日の本より渡海にハ釜山浦の湊より朝鮮の都まで其行程千二百六十里〔六丁一里以下同し〕……」と朝鮮という国の地理を概観するところから始める。鴨緑江を渡って朝鮮の都（文中では「長安」としている）に着くまでの過程でも地理の説明などを加え、『韃靼漂流記』にくらべると朝鮮にかんする知識を中心として潤色が著しい。

またこの巻の後段では、礼曹から世話役としてつけられた看忠という人に城内を案内してもらったという『韃靼漂流

『記』にも述べられている事実の後に、朝鮮の歴史についての歴史的な記事を挿入する。

旅館りよくわんに立かへる。夕れかりすきて後、看忠に申せしハ今日ハ御城ししろを拜見はいけんし、帰朝の後に、本国ほんこくへよきつとまふけ侍さむらふなり。それに付てハ此国くにの御先祖せんその其初め候きたなしやとといければ、されバ候、当王の先祖を教へ申すれハさのミ年代遠めんだいとをからす、数度すうとの興廢こうたいあつて後、今李氏いまりしの国となる。此うつりゆくあらましを開闢かいひやくの時分じぶんより史にある通りはつすいを抜粹はつすいしなぐさミの為申さんと威儀ゐぎをつくろい語りける……

このように巧みに転換して三韓以来の朝鮮の歴史を概説する体裁としている。

第三冊は朝鮮の都で日本人たちが新年を迎えたことに始まり、それ以後の供応のありさま、新年の祝賀、あるいは朝鮮人参を山中で採集するための苦勞などの挿話をのべ、ついで釜山への送還の旅を叙し、最後に十五人が帰国を果たした事実をのべる。釜山の倭館で対馬藩士に引き渡された一行は対馬を経て大坂へ着く。巻末は――

又、御留守居おふせわた方人を添両人へ下さるゝ。古里には先達さきだつて大守の郡代ぐんだい方十五人存命そんめいにて夷国いこくを帰る由、名書ながきをしるし仰渡おふせわたされ、其へ依て来り、帰国のかたによるこべは死したる方にハ愁嘆しゆたんし、俄にはかに作善供養さぜんくようをなす。かくて帰朝てうちうの者共ハは御城下じしやうかへ参上さんじやうし、郡代の御目に懸り有し。住家すみかへ立帰れハ二度蘇生ふたたびそせいすること、父母兄弟妻子ふもきやうだいさいしの悦方よろこび中なくをろかなり。彼の浦島にもあらねと初て孫子に遭ふもあり。これそ希代しだいの物語。ありし次第しだいを書とゞむ穴あな賢かしこく。

とめでたく語り終える。巻頭の枠組すなわち国田、宇野両人の語る物語という体裁は、いつか忘れられ、文学的な物語特有の幸福な結末を迎えるわけである。

第四冊は「附録」で「朝鮮国の図并大明境画の図」「同国より日本江渡海わたりうみの図」の二葉を掲げる。前者は鴨緑江以北の中

国の地名若干を含む朝鮮八道の図で、道名や主要地名を記入し、河川の大略を記す。後者は肥前名護屋から壱岐、対馬を経て釜山に至る経路を描いた絵図で平戸の捕鯨や竹島付近で漁をする朝鮮漁民、オランダ船らしき三檣の帆船などが描かれていて興味ぶかい。ただし、ここで描かれている経路は、文禄慶長の役のさいの侵略ルートであって、漂民一行の送還や朝鮮通信使の経路（博多—壱岐—対馬—釜山）ではない。

さらに「同国八道郡府州県の名目并惣数」という表で八道の都府州県の名と数を挙げ、「日本五畿七道の起（そこり）」で日本の地域区分と対比し、「朝鮮国官名之次第并軍官」では主な官職名とその役割を解説し、さらに「韃靼北京朝鮮通用詞の事」で単語の意味と発音を比べた一覧をつけ、最後に「朝鮮書籍の読方」で結ぶ。つまり附録は全体として朝鮮にかんする基礎的な知識を与えようと意図している。

しかし『寛永漂流記』はこれまで、虚心にそれ自体として読まれて来たとはいいがたい。『韃靼漂流記』にかんする総合的な研究である園田一亀の『韃靼漂流記の研究』の発表は、たまたま昭和十四年（一九三九）、稀書刊行会本『寛永漂流記』の発行直前にあたっていた。このため稀書刊行会本の解説は『韃靼漂流記』との関係の濃厚さを強調することに終始しする結果となった。『寛永漂流記』は、石井研堂編『校訂漂流奇談全集』（統帝国文庫）に「韃靼漂流記」の名で載っているものと「まったく同じ内容」であると断じ、あまつさえ石井から談話を求めて「漂流記の刊行された例は、夢に仮託した『南瓢記』以外に例をみない」といわせている。

これは『寛永漂流記』の性格にかんしていたずらに誤解を招くものである。くりかえし強調するなら、『寛永漂流記』は『韃靼漂流記』を下敷きとしながらも、重点は朝鮮国にかんする知識を提供する意図で語り直された物語なのである。本書のこの性格は、つぎの『朝鮮物語』との関連において一層、明らかとなるであろう。

『国書総目録』によると『朝鮮物語』の題名を冠した書物は数種ある。ここで対象とするのはこのうち木村理右衛門の著した『朝鮮物語』である。^{（注4）}奥付によれば寛延三年（一七五〇）庚午初冬の開板。芝字田川町の山城屋茂左衛門と芝浜松町式丁目の藤木久市の合刻である。著者の木村理右衛門は自序によれば沖慶子（『国書総目録』は有慶子とするが「有」とは読めない）と号し、版元の一人藤木久市と同じ芝浜松町式丁目の住人であるが、経歴は不明である。

『朝鮮物語』は五巻五冊の半紙本で、巻一では朝鮮の由来と日本との交渉、巻二で朝鮮の役（壬辰倭乱）と日本中心主義の立場ながらも朝鮮の歴史を概観し、巻三、巻四では越前人の漂流を物語り、巻五では「朝鮮国渡海之図」「朝鮮八道図」の両図と朝鮮八道郡府州県之事、朝鮮官職考、朝鮮の国語、朝鮮国土産之事の表や解説など付録的な要素を掲げる。

つまり構成をほとんどそのまま『寛永漂流記』から借りている。同書では漂流者たちのソウルでの経験のなかに挿入されていた朝鮮の歴史をふくらませて巻一、二とし、巻三、巻四は『寛永漂流記』の記述を多少、簡略化して充て、巻五はまた同書の「付録」を借用している。「朝鮮国渡海之図」は名前は同じだが面目を一新しているものの「朝鮮八道図」以下はほとんど『寛永漂流記』そのままである。

参考までに『韃靼漂流記』『寛永漂流記』『朝鮮物語』を対照して掲げる。北京で帰国を待ち焦がれていた越前人たちに帰国の許可が出て、朝鮮へと送られる道中の記事である。あたかも日本人を送還するための使者のような描写だが、歴史的事実としては朝鮮王の冊封使に随行して日本人が送還されたのである事は、中国・朝鮮の文献から明らかである。

同年霜月迄待申候所に、同五日に被召出、羊の皮の着物、並下着肌袴帽子踏皮沓皆々被下候て、同十日頃に日本へ御帰し可被成と御申候。其如く十日めに羊の肴二十疋、酒肴沢山に被下、同十一日に馬十五疋率せ、侍と覺しき人迎に参候。十五人を馬に乗せ、奉行所に召連参候。五つ爪の龍の紋付たる大旗二本、白小旗八本赤き小旗四本、笠鋒三本棒十二本、諸事唐の馳走札為持人百人斗添、朝鮮国の境迄被送候。総じて珍敷がり、所々より見物に出申候。人多見へ申候。朝鮮の境迄は十二月九日参着申候。（韃靼漂流記）

同じき年霜月迄、御左右おそしと待所に、同じく五日に奉、役所より罷出よと御意あれバ急役所に参上す。時に奉行の玉ふハ過つるころいふごとく、汝等が事さし心得禁厥へ参内して帰朝のねがひ奏聞し、今日既にかないたり、来る十日のころをひに発足させよと倫言也。是ハ又、禁裏より出る所のたまものなりと羊の皮の小袖（等二）下着、肌袴、帽子、踏皮、沓等を十五人の者共に一々にひかれけれハ大望かなふといひ、其上かかる拝領物迄かたき御

事と、天へもあがる心地して皆々悦び申けるハ粟散辺土の賤の男に、永永天恩をめぐまれ、其上帰朝の宣旨をうけ、殊に路次の用意とて服類かずく拝領し、有難き仕合申べき様アらず。是と申も一ツハ又御館の御影厚きゆへと拝謝してこそ帰りけれ、あんのことく十日めに奉行所よりの使として、明日発足致すべし。是より迎をつかハさん、扱ミづからの餞とて羊の肴二十疋、魚類一桶、酒を添、おびただしく送らるる。翌朝の巳の刻に侍ぶんの人二三人くら置馬をひかせ来て迎のよしを申さるれハ、一礼して馬にのり、いとまこひの其為に奉行所へまいれば奉行立出立たいめん有、十五人ハ頓首して餞の礼よりも往事をのへて謝しぬれば、奉行いよくあハれまれ、無事にて帰朝いたせよと道すからの事をも懇にの玉ひて、当朝の馳走札、官人にさづけつゝ、よくいたわれと申付、おくをさして入玉へバ日本人を馬にのせ、行烈してとそ送りけれ、先に持しは五つ爪の龍をそめたる大旗二本、次に白地の小幡八本、赤地の小幡四本、棒もち二人、是ハ警固の者共のみたり、わろき事あらバしづめん為と聞へける。扱十五人を三段とし五人くの其奇に笠鉾を壱本ツ、已上三本もちにける。警固の人数百人程、前後左右をかこみける。城下を出て行道に此事を聞つたへ道中の間、所々よりも見物に出ること日本にて異国人がまつりをみるに異ならず。(寛永漂流記)

同年の十一月まで御沙汰いかゝとまつところに同月五日に京兆より召によつて参上す。時に京兆の給ふは、当夏なんぢらがねかひによつて其談奏聞申ければ、今日帰国の願ひかないたり、きたる十日のころに当地をほつそくさせ、朝鮮までおくりとゞくべしとの仰なり。是はみかどよりたまはる所のものなりとて羊の皮衣、肌ばかま、ぼうし沓等まで十五人の者ともへいちくゝに下されける。倭人は帰国の願かなふといゝ、其上拝領もの帰国の宣旨までを下さるれハよろこぶ事ハ限りなし。是と申も京兆の御恵みあつきゆへなりとて拝謝してこそかへりけり、扱十日にもなりしかば京兆よりみづからの餞別とて羊二十疋、酒肴を送らるゝ、明朝巳の刻に迎のものを是よりつかはさんとの事なり。かくて翌朝にもなりしかバ、官人二三人くら置馬をひかせて迎のよしを申さるれは、一礼して馬にのり、いとま乞のために京兆尹へまいれば、すなはち出立たいめん有、十五人は頓首して恩義のほどを謝しけれ

ば、京兆いよくあわれまれ無事にて帰国いたせよとねんころにの給ひて当朝の馳走札、官人にさづけつゝ、能いたはれと申付て入給ふ。かくて日本人をば馬に乗、行烈してこそ送りける。まつさきに龍の大はた二本、次に白地のこぼた八本、赤地の小はた四本、棒もち二人、扱十五人を三段とし五人くゝのそのさきにかさほこ一本つゝ、已上三本もちにける。けいごの人数百人前後左右をかこみつゝ威儀をたゝして通りけり。(朝鮮物語)

このように対比すれば明らかのように『朝鮮物語』は『寛永漂流記』の書き換えといふべきで、直接、『韃靼漂流記』に拠った物語とは認められない。つまり実録を基にして文学を作ったのではなく、他の文学を書き直して新たな物語を作ったのである。『韃靼漂流記の研究』において園田一亀は『韃靼漂流記』の翻案としての『朝鮮物語』を重視し、その巻三と四を同書に鉛印、紹介しているほどだが、園田は『寛永漂流記』の存在は知らなかったため『寛永物語』と『朝鮮物語』の関係には気づくべくもなかった。稀書発行会叢書による『寛永漂流記』影印本の刊行は園田の著作より後の事である。

それでは『寛永漂流記』『朝鮮物語』はなぜ書かれたのであろうか。京都大学国文学会による影印本『朝鮮物語』の解説で、浜田敦は延享五年(一七四八)に將軍家重の襲職を祝賀するために来日した朝鮮通信使の江戸参府によって引き起こされた朝鮮への関心が、『朝鮮物語』の出版の動機となったことを示唆している。

であるなら『朝鮮物語』が下敷きにした『寛永漂流記』もまた、朝鮮通信使の招聘によって引き起こされた関心に触発された書物とはいえないだろうか。とくに第四冊巻末の最後の行は数字分を黒く彫り残した後に「来聘之節泊所御□□」の文字が見える事は、通信使との何らかの関係を暗示しているように思える。

また先に引いた北京から朝鮮への行列の箇所には、挿絵が載っているが、本来、韃靼人の行列であるべきものが、「清道」「巡視」などの旗を掲げた旗手、龍の旗をかざした騎馬の兵士、鉦、太鼓、ラッパ手、虎の毛皮を敷いた輿に乗った大官、日傘をかざした従者など、明らかに画家は朝鮮通信使の日本国内での通行にイメージを借りている。また先に引いた行列の場面の描写の末尾に「道中の間、所々よりも見物に出ること日本にて異国人がまつりをみるに異ならず」と

あるのも、通信使通行との関連を暗示するが如くである。傍証ながら『寛永漂流記』と通信使の来日の関係を示すものといえはしまいか。とすれば天和二年（一六八二）ないしは正徳元年（一七一一）の通信使でもあろうか。前者は將軍綱吉、後者は家宣の襲職を賀すための通信使であった。

□語りなおすことへの情熱

前節で対象とした二刊本は、いずれも朝鮮文化の紹介という文脈で漂流記を換骨奪胎したものだが、純粹に文飾上の情熱から書き直したと思われる場合をつぎに示す。例示するのは、ロシア漂流の石巻漂流民にかんする記述である。

寛政五年（一七九三）に陸奥国牡鹿郡石巻〔宮城県石巻市石巻〕の米沢屋平之丞船・若宮丸（十六人乗組）は、江戸への航海中に漂流、翌年五月にアリューシャン列島に漂着した。乗組員は現地のアレウト人に救われ、さらにロシア人の手によってヤクーツク経由でイルクーツクに送られ、そこに定住した。ロシアはエカテリーナ二世の時代には、大黒屋光太夫らを送還して日本との国交を開こうとする積極政策であったが、この時代はパーウエル一世の治下で対外政策は著しく後退しており、漂流民には関心が払われなかったのである。

ところがアレクサンドル一世の即位後、ふたたび日本との通商交渉を行う議が強まり、八年目に突然、漂流民たちはモスクワに召還され、日本へ送還されることになった。生存者十三人のうちモスクワへの旅の途上で四人が脱落、さらにアレクサンドル一世との会見の席で残留希望者が出て、結局、帰国を望んだのは津太夫ら四人だけであった。彼らはロシア最初の世界周航艦隊でもあった海軍大佐クルーゼンシュテルンの指揮するナデジダ号、ネヴァ号の艦隊に日本使節レザノフとともに乗せられ、文化元年（一八〇四）九月に長崎に着いた。外交交渉は延引を重ね、結局、ロシア側の希望は達せられなかったが、漂流民たちは翌文化二年（一八〇五）三月になって、ようやく日本側に身柄を引き渡され、長崎奉行による取り調べ後、十月に仙台藩に引き取られ、江戸藩邸での事情聴取の上、文化三年末に帰郷を果たした。

長崎への出現と開国の要求によってロシアへの関心が高まっていたため、当然、その経験は注目され、各種の記録が作られた。すなわち①長崎での口書二種、および仙台藩での口書。②蘭学者大槻玄沢らによる『環海異聞』十二巻とい

う編纂物漂流記。③炉辺談話型漂流記である馬場安五郎による聞書『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亞漂流之事』（蔵用老人纂『北狄事略』所収）。

さらに③にかんしては、先行論文でのべたように私が「流布本」と総称したさまざまな異本が存在する。その系列はいまだに明らかにすることができないが、多くの場合、③の中心となる津太夫の談話のみを採用し、補足的な佐兵衛の談話は脱落する。代わりにロシア艦で帰国したさいの長崎警備の状況にかんする記事が加わる。またロシアでの見聞に多少の補足情報が加わる場合もある。多くはイルクーツクの丸太小屋、算盤、オルゴールなどの絵図を加える。

この事から見て、馬場安五郎の聞書に加工を施した一、ないし二の別本が存在し、それが転写される過程でさらに変種を生んだものであろうと一応、仮定している。

しかしそれは、いわば加工・補足によって記録を補おうとする熱意である。もととなる漂流記録（この場合、馬場安五郎の記録した津太夫らの聞書）を読んで、同じ漂流にかんして何らかの情報をもち人物がそれに補足を試みた。それは長崎警備にかんする情報であったかもしれないし、津太夫や佐兵衛から補足的に話を聞き出したものかもしれない。この種の補足は歴史的な知見を一層、完全なものとしたという動機に支えられている。

ところが前述した『魯西亞国漂流記』（吉野基介写）の題名をもつ別本は、これらの流布本ともまた性格が異なっている。この写本は蘭学者・古賀洞庵がロシア関係旧記を筆写した叢書『俄羅斯紀聞』（四集四十冊・自筆本。早稲田大学図書館蔵）に含まれる。^(注5)他に内閣文庫蔵の『外国叢書』第十八冊に同文の『魯西亞漂流記』と題する写本がある。これらは『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亞漂流之事』（馬場安五郎）そのものに文飾を加えて語り直した物語とみなされる。

この『魯西亞国漂流記』ないしは『魯西亞漂流記』は、漂流経過、ロシア滞在中の事情、送還途上のモスクワや航海中の見聞、風俗記事という順序で、先行論文で私が紹介した『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亞漂流之事』（馬場安五郎）とまったく同じ構成をもっている。いちじるしく文飾は加わっているが、事実関係に新しい知見が認められないので、筆者の情熱は物語りを語り直すこと自体にあったものと考えたい。

文例を示す。ここに挙げたのは漂流後、はじめてアレウト人と遭遇する場面である。

六月三日に人のやうなる者遠目に見ゆる故、少し伝馬舟を岸へ寄せ、能々見候へは人之姿は、天窗は残裁にて衣類は鳥の羽惣已に生たるごとく也獸の皮を着し、さながら人とは見へず。

是必鬼ヶ島なるへしとおもひ、船中きもをひやしおそろしくなり、此地逃行かんにも行先も知らず何国へ行事も叶ハされハ、如何はせんとおもへとも、岸へ乗付、鬼の餌食になる事の悲しくあれハ我国の親兄弟妻子の事を思ひ出し、たがひに顔を見合せて一同に声をあけて泣かなしみければ、良有て彼島の人々男女十四、五人集り、手招き致ける故……

(陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事)

六月三日に遙に望み見るに、人の姿とおほしき物見るへしゆへ、舟を早め嵐に寄、能く見れハ人也。

されとも頭は斬髪にして身には鳥の羽 又は獸の皮を着し、其容貌の怖しき事譬ふへきなし。是世に云所の鬼ヶ島なるへけれハ、陸に上れハ忽ち彼鬼等に捕へられ餌とならんは必定なり。これら之事は知らずして、本邦にある親兄弟妻子は、今日は還りくるや、明日は船の戻るやと帆の影を見る毎に、海辺へ出て待恋らんと思へは悲しさやるかたなく、又々、肉も鬼の為に喰われなんとおもへは戦慄として齒の根も合す。誰しも云を出すものなく茫然として居たりしに、良ありて後、彼鳥ともいふへき人十四、五人集まり来り、こちらへ上るへしと頻りに手招きせしゆへ……

(魯西亜国漂流記)

このように文飾が多く加わるのは、他に死者が出たさいや告別の場面など、漂民の感情が発露する場合が多いことが認められる。

純粹に異文化を体験した場面などは、かえって原文に近い。

比較のためロシア皇帝との謁見のさい、皇太后と皇后を描写した部分を掲げる。

一、帝王の御前に罷出候節、帝王の御母公并御后も御同席にて被居しめ、御母公御後の装束ハ蟬の羽の様なる薄きものへ金銀なと縫付、光かかやきてまはゆき程の装束也。后は御年いまた十六、七才と見へさせられて、いとやさしき美女なり。

(陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事)

○国王の前に出し時、母后后妃も其席に座し玉ひし。其装束は上に蟬の羽の如き薄き衣なり。金銀の糸にて蝶杯の模様を縫ひ、またなきまてに光り輝きたり。后妃は歳の頃十六、七歳にもあるへく美人なりし。

(魯西亜国漂流記)

つまりこの書き換えを行った筆者の情熱は、主として漂民になりかわってその感情を代弁し強調することに注がれたのではないかと推察されるのである。

「魯西亜漂流記」(古賀本)の奥書にいう。――

此書の末に文化三寅年六月中、石巻出役のせつ、津太夫が夜話を聞、又七月に至り野深の湊に帰り佐兵衛の話を聞、書留たるよしを記しぬれと、その編たる人の名は見へす。

彼漂民等の魯西亜の属島より漂出し、其本地に入、後に王都に迎へられて国王の許しを得、長崎に送り帰されし事の本始ハ仙台侯の侍医、大槻賀茂か津太夫らを質問して著せし環海異聞に明らかなり。

此書、嚮に写して蔵するといへとも、次第に其始末を閲せんには此書も又一の■なるへしと、文政八年乙酉の七月末つかた、東都の逸民星野基介、竹源居におゐて斯 写し卒ぬ

事情は明快で、江戸に住む星野基介という人物が、入手した写本を文政八年に転写したのである。問題はその転写の

質にかかわることになる。まずテキストは馬場安五郎の『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事』の系列のものだったが、すでに馬場の名は逸していた。また津太夫、佐兵衛の本貫である松島湾内にある寒風沢島（現在の行政区画では塩釜市に属する）の名を誤って野深（北海道。現在、日高支庁三石郡に属する。元浦川の西岸に位置し、三石昆布の積み出し港の三石に近い）としている。しかし「石巻出役の節云々」という一節には馬場安五郎聞書の奥書（のちに掲げる）の痕跡をとどめている。星野基介が入手したテキストはすでに転写を重ねたものであったことが推察できる。

これを星野が忠実に写しとただけだったとするなら、すでに文政八年以前に加工が施されていたということになる。しかし「嚮に写して蔵するといへとも、次第に其始末を閲せんには此書も又一の■なるへしと……東都の逸民星野基介、……斯写し卒ぬ」という語感は、蔵していた写本の文章を手すさびに改めつつ写したということを示しているまいか。また入手したテキストの忠実な転写であったなら、少なくとも星野が触れている原テキストの奥書が附属している筈だが、それも欠けている。流布本系列のテキストに手を加えたのは、「東都の逸民」を自称し「竹源居」という書齋号をもついかにも趣味人風な星野基介その人だったのではなからうか。

念のために『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事』の奥書を掲げておく。

「此書、文化三寅年六月中、石巻出役の節、津太夫より聞書留、尚又寒風沢帰着、同七月中、佐兵衛より聞し事も書加へ置なり

馬場安五郎」

古賀洞庵の『俄羅斯紀聞』の書写時期は文化八年（天保十一年（一八一）〜一八四〇）とされる。ここに含まれる「魯西亜国漂流記」は、むろん文政八年に星野基介が書き改めたテキストに依拠している筈だが、注で示したように『外国叢書』所収のテキストと共通する錯簡を含んでいる。つまり文政八年の星野の写本が、さらに転写される過程でテキストに乱れを生じたのであろう。

類似の書き換えの例をもうひとつ挙げて置く。写本の題は『唐土漂流噺』(内題「唐土江漂流之噺」^(注6))。この漂流は天保十年(一八三九)十一月、遠江国佐野郡高御所村〔静岡県掛川市高御所〕の茂左衛門の持船昇栄丸に同国城東郡沖之須村の沖船頭仙太郎、水主松之助、辰蔵の三人が乗組み、江戸廻米を積んで出港後、漂流のあげく中国に漂着、救助されこというもので、伝統的送還制度のもとに浙江省平湖県の乍浦から天保十三年(一八四二)に長崎へ送還された。内容的には比較的単純な漂流記である。

本漂流については口書を欠くが、明らかに口書に加筆したとみられる『唐土漂流噺』という別物語のみが存在する。この場合も内容的には何らの新しい要素はないが、表現がいちじるしく華麗な舞文となっている。

同十四日、梢々沖へ遠く漂ひ行たれハ、詮方なく檣を切捨候時、三国一の不二山と云も漸、将棋の駒の形斗に見へたり隠れたり、最中、多分ハ見えぬよちづ成けり。扱々悲しや日本ハ弥遠く成し事也と顔色も青さめ、心細く思ふ内、終に夕方になり、同十五日ハ早国も見へず。西も東にも海上広くまんくとして目にうつるもきとては一ツもなく、鳥の住むべき嶋も見へず。実鳥もかよはぬ八丈ヶ嶋とはヶ様に広き海の事を申やらん。哀淋しき夕暮に月も高くと出れ共、心の雲は晴れやらす……

口書に文飾を加え、物語としては滑らかな語り口となっている。この場合も『魯西亜漂流記』同様に、依拠した事実関係の枠組みを動かすわけにはいかないので、この他、乍浦で死者を出したさいの描写など、読む者の感情に訴え得る情景において文飾がはなはだしい。書きかえの動機はここでも感覚的なものであったといえる。

この漂流談には、実は当事者たちがヨーロッパ人との交渉を隠蔽しているという背景がある。つまりマカオ発行の英文雑誌 The Chinese Repository (中国叢報^(注7))によると、同船は海上漂流中にアメリカ船に救助され、ホノルル経由でマカオに送られたという。この事実は日本側の記録にはまったく現れないので、漂流民たちは、帰国後の取調べで西欧人との交渉を隠蔽することに成功したものとみられる。そのことと『唐土漂流噺』の文飾とは直接には関係しない筈だが、

この点については、今後、さらに考えてみたい。

□物語への飛躍——「北海異談」の場合

日本人の北方への関心を背景に、意図的に歴史を物語へと飛躍させたものに『北海異談』がある。この物語については松本英治の論考があるのでこれに触発されながら論をすすめたい。^(注8)

文化三、四年（一八〇六、七）のロシア武装船による樺太、択捉島などの日本側蝦夷地根拠地の襲撃事件——いわゆる文化の魯寇事件はロシアによる北辺からの脅威を日本の各階層に印象づける事件となった。

この現実を背景に大坂町奉行は文化五年七月に写本として貸本屋を通じて流布していた『北海異談』を摘発した。文化魯寇事件を主な題材として幕府の高官を実名で記した上に虚偽の内容をあたかも事実であるかのように書き記した事が禁忌に触れたのである。

作者の永助は引回しの上獄門、彼に北方情報を集めて提供した「軍書読渡世致し候」秀弘は八丈島へ遠島。本を取扱った俵屋五兵衛ほか二名の貸本屋も大坂三郷払という重い処罰が行われた。この後、無株の貸本屋の仲間加入が強制され、貸本屋への統制が強化される。幕府にとってフィクションによるロシア物語の流布が好ましくないものとして、極めて重大視された様子をうかがうことができる。

にもかかわらず『北海異談』は現在、公共図書館に蔵されているだけでも十数点を数えており、かなり広範囲に流布したことを示している、名古屋の著名な貸本屋大野屋惣兵衛〔大惣〕は目録上、二種の『北海異談』を所有していた。現在、国立国会図書館と京都大学図書館が所有する「大惣」の印のある本がそれとみられる。代表的な国立国会図書館本でみると五冊二十巻。大黒屋光太夫とラクスマン使節、これをめぐる幕閣の討論、レザノフ来航と長崎警備の状況、文化の魯寇などを虚実とりまぜて語ることを主な内容としている。^(注9)他にたとえば私が豊橋中央図書館橋良文庫で見た端本には、長崎の貸本屋の所蔵とおぼしき記載があった。

巻頭は「夫須らく国家の奥處天下の治乱をかんがうるに人君の賢愚、執事忠奸によるといへども、またハ四海の順行

天気にもよれり。我国、家康公の武俠を以て諸侯ふくさしむ仁徳をせてにより二百年來、合戦を忘れ平安の民となれり。実に堯舜の政事といへども是にしかんや」と型どおりに徳川の天下を讃えるが、つづいて「……近來烏魯舎は日本の東北より其属国南海の内までを／＼となり誠に北海第一の英傑なり」とロシアに筆をのぼし、その沿革を述べ、林子平の『海国兵談』（大惣系の諸本は「海陸平談」とする。誤記ないしは作為か）を引いてその脅威を強調する。

また「抑天地の内に世界たる所六世界有。其内の一世界ハ天竺、漢、朝鮮、琉球、日城、蝦夷、八丈島等、是一世界也。又一世界ハ烏魯舎、弘蘭察エケレス・イタリヤ・紅毛イスハンヤ・ムスコビヤ等を一世界とす。此外四世界あり。乾坤の広き事斯のことし。右六世界の内、套羅斜四世界を攻めたかへ、其勢ひ破竹の如く、此訳ハ彼国の武備志等を数え、蘭方の学文をして是をしり、其上、長崎表におゐて阿蘭陀人と対和して烏魯舎の武道の様子、人倫の賢愚等を聞、或ハ武器火術の法製を承りしに誠に恐るへき国なり。其上、女帝カタリーナ仁義を飾り、諸国をしたかへ武徳をひらく。世の英雄を伏さしむる事、我朝豊臣君の盛の時のことし……」（第一冊十丁）と少なくとも『北海異談』が、近世末の日本における世界認識の拡がり前提にしていることを伺わせる。それはたとえば大阪の町医者『浮世のあり様』と題した世相見聞集に阿蘭陀風説書を引用するような時代を背景としていたのである。さらにここで引用した箇所では、物語作者が長崎におけるオランダ人からの直接の情報源をもっていることを匂わせて記述に重みを加え、乱世における英雄待望によるものであろうか、暗に秀吉を賛美するかのような表現までみられる。

この後、さらに松平定信の海防策に言及し、浦賀の視察などを自ら行っておきながら他方で林子平を処罰する矛盾を指摘する。これだけでも幕府関係者を刺激したであろうことは想像に難くない。

卷ごとに事書で章だてがされているので、便宜上、丸括弧に包んで巻数と内容を示しておく。以上が卷之一「烏魯舎武略勝る事」、卷之二「烏魯舎日本を伺ふ事」である。ついで大黒屋光太夫の経験にしたがってロシア事情をのべる。——卷之二「勢州白子船頭幸太夫漂流の事」「国王幸太夫に逢給ふ事」。卷之三「烏魯舎井楼之事」「国王より日本へ送船之事」。なお『北海奇談』では光太夫はすべて幸太夫と表記されているが、ここでは引用以外は光太夫を用いた。

卷之三の事書のなかの井楼はすなわち青楼であって、読本らしくロシアの遊女の事などを詳述する。この種の風俗記

事にとりわけ関心をもつのは、庶民的な関心がもっとも集中する場とみなされるからである。「烏魯舎井楼之事」の書き出しは――

夫、風土異にして草木人物の替といへとも人倫の情一ツにして四海同気なり。爰に烏魯舎の都外に遊里あり。地名をオリエンと号す。全盛の土地なりといふ。幸太夫が旅館の主人アランカン、或時、幸太夫に申けるにハ久々の逗留、嚙御退屈にて有へし。依つて客を伴ひ遊里に至りて一盃をかたむけんハいかにと申ける。……

以下、アランカン夫妻、その娘とともに公娼のいる遊里に赴き、酒席が設けられ、最後にロシア人たちは帰宅して、光太夫は名指した女としめやかな一夜を過ごした事が物語られる。遊里のありさまは「よく／＼此家の躰を見るに表に一つの楼門有、白字を以て額をかけ其風雅いわんかたなし。朱の廻廊有、爰に瑠璃の櫓あり、是を登る事数十歩にして二階に至て皆朱の柱天井敷板、何れも盃の内に座するが如し……」と、ほとんど想像によって絢爛豪華さを表現しているが、どこかで『北槎聞略』や「露西亞国漂流記」に出て来るロシアの遊廓のありさま、さらには皇帝の宮殿の豪華な有り様の描写を踏まえているかのようでもある。

光太夫がロシア人の家族（史実では、エカテリーナ女帝の侍女やキリロ・ラクスマン夫妻、その娘ソフィアなど）に遊廓に連れて行かれること、そこが五階建の美麗な建物であること、酒宴の様子、やがて光太夫が敵娼を指名し、席を改めて五人の娼妓と音楽の伴奏つきで酒宴を行うこと、翌朝、娼妓が名残を惜しんでさまざまな贈り物をくれたことなどの事実がどこかに反映している。ただし人間関係などを整理して、好奇心に応えるような工夫が見られる。

もっとも桂川周甫苦心の光太夫供述による編纂物漂流記である『北槎聞略』は、献上品であって桂川家にも草葉とどめなかったという秘本であったから、『北海異談』の筆者（ないしは情報提供者）の情報源そのものに関心がもたれる。おそらく帰国後、幕府御薬園で生涯を送った光太夫が蘭学者と対話したりした機会に漏れた談話が反映しているのであろう。

ついで物語は、光太夫らを送還することによって日本との通商交渉を計ったラクスマン使節と幕府の対応を示す（巻之四「松前を御届ニ付江戸御評定之事」「関府を石川将監下向之事」）。巻之五では「蝦夷開発之事、蝦夷公領になる事」と幕府の北方政策の転換を描き、巻之六は「幸太夫故郷^江帰る事」「朝鮮人來朝廷引之事」とする。ここでは朝鮮通信使の來朝が延期されたのは、ロシア人が通信使にまぎれこんで日本の国情を偵察するおそれがあるというオランダ商館長の密告であるとしている。まったくの虚説であるが、松本も指摘するように当時の庶民の意識の反映としては興味を惹かれる。

巻之七は、いくらか話題を転換して「武門繁昌之事、金銀御貯之事」となり、ついで巻之八「烏魯舎人絵凶之事、烏魯舎一艘長崎^江至る為の印の事」、巻之九「長崎組諸家御固之事」となる。巻之八は松平定信の幕閣がラクスマンに与えた信牌のことなど、ほとんど実際の文書の写しであるが、ラクスマン使節よりはむしろレザノフの長崎來航にかかわる記録である。ロシアに与えた信牌は給付の時点というよりは、レザノフが持参して通商を求めた時点で一般に知られるようになったのである。

長崎の警備体制への関心は石巻漂流の聞き書（「陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事」の「流布本」系列）との関連で別に考えたい。

巻之十（「大坂御城内武器之事」「西国諸侯江御用意之事」「神力利現之事」）。を経て巻之十一以下が文化の魯寇事件（フストフ、ダヴィトフによる樺太、択捉襲撃事件）となる。巻之十一（「南部津軽を御届之事」「箱館奉行御下知之事」「附り江戸江諸家を御届ケ之事」）、巻之十二（「南部侯後度御届ケ之事」「エトロウ嶋タヅリ山合戦之事」「松前船軍之事」「御目代外ヶ浜江着陣之事并諸家の軍勢陣勢を張る事」）は、虚実とりまぜてロシア侵攻にたいする幕府の対応を扱っている。

とりわけ巻之十一の「南部津軽を御届之事」は、事態に驚いた將軍家齊が中奥で評議を行い、老中松平信明が松前上知一件を片付け、奥羽大名によって津軽松前地方の警護を行うことを主張、そのために名代の派遣を求めた。これに対して牧野越中守が仙台藩主松平政千代は幼少であるが、幸い若年寄堀田正敦が叔父にあたるからという理由で堀田を名代に推し、同意を得る。同時に家齊の娘浅姫を伊達家に降嫁することが決定される。

松本の指摘によれば、中国奥評議については松平信明の伝記『嵩岳君言行録』に引用されており、さらに内藤恥叟が

『徳川十五代史』にも引用しており、作並清亮の『東藩史稿』にもほぼ同様の記事がみえるという。『北海奇聞』関係者が幕閣の決定について機密条項をも入手していたとみられる一例である。

卷之十三以下は文化四年（一八〇七）六月から十一月までという時間を設定し、ロシア船の蝦夷地襲撃と日本側の防衛について記すが、史実とは著しく異なっている。蝦夷地に派遣された堀田正敦を総大将として仙台藩の片倉小十郎や茂庭周防が活躍してロシア軍を撃退する。「かくあって欲しい」という庶民の願望の文学的表現といえようか。

とくに突然に「白石小十郎家久、家祖二万五千石、白石の城主」が仙台勢の大将として現れる。また戦さの最中に後藤孫兵衛という仙台藩士が活躍するが、そこにも唐突に茂庭周防（伊達周防守茂庭）の名が仙台勢の大将として登場する。白石は伊達政宗の謀臣、茂庭周防は歌舞伎の『伽羅仙台萩』などで知られた仙台藩の御家騒動（仙台藩のいわゆる「万治の大変」）のなかで正義派とされる人物であることにも注目すべきだろう。大衆的に人気のある人物が危機にあたって時空を超えて出現するのである。

また筆者のロシアに対する知識をひけらかしたともとれる部分もある。仙台勢がロシア勢と対陣したさい、ロシア側から「シヨキネ権」という人物が登場して、あたかも中世の戦記ものの世界を思わせる名乗りを上げる。

シヨキネ権とて日本にて目なれさるものを提げ立出る。其たけ七尺もあらんと思ふ斗り。両眼ハ松明の如く照り輝き恐敷あり様にて名乗りけるハ『ヲロシア国アレクサントル皇帝の壅軍納吉將軍是にあり、和人の大物に出合ん名乗れく』と呼はつたり。是を聞て伊達家の戦士、銘、舌震しける……

物語では、この名乗りは日本語であったというのである。仙台勢は、ロシアは小夷だと侮っていたが日本語で名乗る人物がいたとはと驚く。そして物語作者は、彼は日本語を光太夫、磯吉、あるいは仙台人（石巻漂流民たち）から学んだのであろうというような知識を披露するのである。

この部分の構成は卷之十三「浜手勢揃之事」、卷之十四「仙台勢敵船を襲ふ事」「茂庭周防追討之事并諸家の軍勢陣勢を

張る事」、卷之十五「御目代下知早船之事」「本陣にて評定之事」、卷之十六「日本勢御手配之事」「西蝦夷ニて海陸争戦の事」、卷之十七「船手勢まどひ給ふ事」「敵船江忍ひを入る事」、卷之十八「水戦火攻之事」、卷之十九「烏魯舎船銅札を残すの事」「日本勢蝦夷を引払ふ事」「堀田侯帰府之事」、卷之二十「敵味方勝負を計る事」「諸侯神文之事」「諸侯恩賞之事」である。そして最終の二十卷では戦争の終結と恩賞を扱って、この物語は終わる。

結局のところ『北海異談』は、興味本位の娯楽性の強い物語ではあるが、ロシアによる北方の脅威という歴史的な事実を背景に、対外危機の感覚に色濃く彩られている点は、近世末の社会を反映したものといえる。

まとめ

以上、年代順に漂流記録から文学的な虚構を含む物語が発生した事例を概観してみた。『寛永漂流記』と『朝鮮物語』の場合は、啓蒙的な意図のもとに歴史事実を利用しているものと見なされよう。

その後の各種の漂流物語の書き換えの意図はそれほど明確ではないが、強いていえば戯作者的な情熱とでも名づけ得る性格のもので、どちらかというと言場人物の感情を文飾によって強調することに主な情熱が注がれているように見える。このような書き換えの情熱は、一種の創作活動であっては転写を重ねることに変化していった近世に写本で流布した多くの物語とも共通の根をもっているように思われる。

『北海異談』となると、事実との乖離はさらにはなはだしく、まったくの創作に近いが、背景として、作者に強い対外関心があることを見落とすことはできない。結局のところ漂流物語は、異文化経験にかんする見聞が刺激となって想像力を刺激し、文学化をもたらしたものができよう。

注

- (1) 拙稿「炉辺談話型漂流記の形成について——石巻若宮丸津太夫の経験を中心に」、『調布日本文化』第七号（調布学園女子短期大学日本語日本文化学科紀要 川崎市 一九九七年）。

(2) 『韃靼物語』(異国物語)は園田一亀の『韃靼漂流記の研究』(南満洲鉄道株式会社庶務課 奉天(現在の瀋陽)一九三九年)によった。戦後、原書房の「北方ユーラシア叢書」の一冊として荒川秀俊の解説を付して影印された(一九八〇年)の他、『韃靼漂流記』(寺田隆信解説、平凡社東洋文庫一九九一年)として再刊行されている。

(3) 稀書複製会叢書(新生期第二十冊)米山堂発行。一九四〇年)による。題名は「寛永漂流記」であるが、同叢書が底本とした林若樹の「若樹文庫」蔵本では題簽はすでに脱落して、後人が「寛永漂流記」と書してあった。複製にあたって三村竹清の染筆によって新たに題簽を付したという。『国書総目録』によると、本書はわずかに天理図書館が所蔵するのみで、そこには「寛永漂流記」とある。同図書館の蔵本は未見だが、原題簽には「寛永漂流記」とある可能性がある。稀書複製会叢書本でみるかぎり内題はなく、他にも原題名を示す記述は一切認められない。

稀書複製会本は線装本四冊。二十三・五×十六・五センチすなわち半紙判で、各冊はそれぞれ本文十二丁、十二丁、十一丁、九丁である。

(4) 現在、管見の範囲で国立国会図書館、東京大学総合図書館、東北大学図書館、国学院大学図書館などの蔵書は「解説」を欠いているので、「解説」にかんしては複製会本をさらに洋装で影印した『新編稀書複製会叢書』第三十九卷(臨川書店 京都 一九九一年)によった。

(5) 木村理右衛門『朝鮮物語』——国立国会図書館蔵本によった。東京大学総合図書館、国学院大学図書館などにも蔵する。京都大学文学部国語学国文学研究室編の影印本(京都 一九七〇年)がある。

(6) ここでは北海道大学附属図書館北方資料室蔵の『俄羅斯紀聞』コピーによった。『魯西亜漂流記』はその第四集二冊に収める。

この写本と内閣文庫の『外国叢書』のテキストとは共通する箇所には錯簡が認められる。すなわちイルクーツク滞在中に病死者が出る場面の「涙に袖を濡らす」という箇所とイルクーツクを発足する箇所と告別の涙を流す場面の同様の表現のところ、誤って接続したために風俗記事の一部の順序が乱れている。

(6) 「唐国漂流漸」／豊橋中央図書館の橋良文庫蔵。天保十三年写本。二十六丁。なお地元の大須賀中学の藤田清五郎氏による口訳本『遠州沖之須昇米丸唐土漂流物語』(一九六六年 私家版)がある。テキストは橋良文庫の『唐国漂流漸』と同文らしくみえるが、藤田氏の底本とされたテキストには、天保十三年十月末、城東郡雨垂村(現・大須賀町雨垂)の庄屋、金原文重

作とある由。

- (7) The Chinese Repository Vol. X, No. 2 (Feb. 1841) P. 142.
- (8) 松本英治「貸本『北海異談』筆禍事件にみる地域間の情報交流」(地方史研究協議会研究例会レジュメ一九九八年二月)、を経て、同「北方問題の緊迫と貸本『北海異談』筆禍」『洋学史研究』十五号(一九九八年四月)。
- (9) 『北海異談』のテキストは国立国会図書館を中心に、同書に欠落のある第四冊については同系列の東京大学総合図書館蔵本を参照した。また豊橋市中央図書館蔵橋良文庫本を適宜、参照した。同本は長崎の貸本屋の蔵本であつたらしく、国会図書館に比べると振り仮名が多く、文章にも加筆が目立つ。『北海異談』の書誌的な記事は松本論文を参照されたい。